

## 書評:阿部武司『アーカイブズと私—大阪大学での経験—』

大阪大学共創機構社会学共創本部 教授 菅 真城

本誌の読者には、著者の阿部武司氏（以下、普段どおりに「阿部先生」と呼ばせてもらう）は、元大阪大学文書館設置準備室長、元大阪大学アーカイブズ室長としておなじみであろう。本書は、阿部先生が「大阪大学大学院経済学研究科に教員として在職していた二世紀初めごろの十余年間に執筆し、あるいは後に当時を振り返って書いた大学や学界に関するエッセイをとりまとめたもの」とのことである。大阪大学アーカイブズの設置についても多くのページが割かれている。まず、本書の目次を示す。

はじめに

- 第一章 図書館・博物館・文書館
- 第二章 企業アーカイブズと大学
- 第三章 大学アーカイブズと企業アーカイブズ—現状と課題—
- 第四章 アーカイブズ創設とアーキビスト
- 第五章 大阪大学アーカイブズの構築
- 第六章 日本の官公庁における文書保存
- 第七章 外国のアーカイブズ
- 第八章 大阪大学経済史・経営史資料室
- 第九章 社会科学の国際化
- 第一〇章 読書の効用

本書は阿部先生の経歴に従って書かれたものだけに多様な論点を含むが、筆者が気になった事柄を列記する。

第一に大学アーカイブズ論として。これまでの大学アーカイブズ論は、筆者をはじめとして、実務者の立場から論じられてきた。一方、本書では、初めて管理者の立場から大学アーカイブズ論が論じられた。大阪大学アーカイブズがどのようにして出来上がったのか、つぶさに知ることができる。例えば、「大阪大学アーカイブズ」の「アーカイブズ」という名称がなぜ採用されたかについて学内事情を赤裸々に告白している（60頁）。本書各所で、阿部先生がどのようにして大阪大学アーカイブズを作

り上げたかが述べられている。管理者として大学アーカイブズ設立の役割がまわってきた教員には大いに参考になるであろう。筆者の印象でいうと、阿部先生は口は出さないが責任は取るという、理想的な上司であった。「第五章 大阪大学アーカイブズの構築」の初出は、『大阪大学文書館設置準備室だより』『大阪大学アーカイブズニューズレター』であるが、その時々学内の課題に理論武装しようとしたことが懐かしく思い出される。

第二に企業アーカイブズ論として。経済史・経営史研究者として、また企業史料協議会副会長として、企業史料を利用する立場から国内外の企業アーカイブズについても多くのページが割かれている。

第三にアーカイブズの国際比較として。社史・団体史の執筆と英米における企業史料保存の視察から、「日本では官庁の縦割り行政の弊害と思われる図書館・博物館・文書館という硬直的な区分が、英国では柔軟に使い分けられており、図書館とアーカイブズの共存がごく普通にみられること」（18頁）、「企業が消滅した場合でも大学附属図書館や国公立の文書館で、同じく専門家を置いてきちんと保管・公開すべきであること、日本では、とくに国公立機関において図書館・博物館・文書館を硬直的に区別するが、この点は状況に合わせて柔軟に対処すべきであって、担当者が仕事をしやすく、また利用者が使いやすい施設の構築を目指すべきであること」（20頁）が指摘される。いわゆるMLA連携に関わる重要な論点であろう。ただ、英米と比べて日本でのMLA連携がうまくいかない点について、図書館と博物館の運営にも携われた阿部先生なら、さらに突っ込んだ論述が欲しかった。もっとも本書が「大阪大学での経験」であるから、筆者も大いに反省せねばならない。

また、海外のアーカイブズについても多く紹介されており、それに対して日本の官庁の文書保存（第六章）には悲しいものさえあった。

第四に教養の重要性である。「第一〇章 読書の効用」では、深い思考の基礎としての読書の重要性が語られ、「第九章 社会科学の国際化」では、外国語を用いた国際共同研究のあり方について論じられている。つつい外国語を避けてしまう筆者にとっては、反省させられるところ大である。

多くの読者が疑問を持つであろうどうして大阪大学アーカイブズが設置出来たかという、阿部先生が「とにかく八年間余りも頑張ってきたのだから」（61頁）ということに尽きると思う。現在、国立大学86大学中、「国立公文書館等」を有する国立大学は12大学しかない。この状況を克服するには、学内的にも、対外的（対内閣府）にも大きなハードルが存在するであろうが、第二、第三の阿部先生が出現することを願って、擱筆することにする。

阿部武司『アーカイブズと私—大阪大学での経験—』を推薦します

九州大学 記録資料館教授 三輪宗弘

深い蘊蓄、鋭い読み、幅広い視野から繰り出される英知を、本物を探し求めている読者諸賢に一読いただきたい。

阿部武司先生との初めての出会いは、東大の中村隆英先生のゼミであった。中村先生の質問に「次から次への的確かつ具体的に答える」若き阿部助教授（筑波大学）に、ここまで資料を読み込んでいる博覧強記な研究者がいるのだと正直に思った。「隆英先生」の「嬉しそうな、満足したぞ」という顔を今も鮮明に思い出す。35年ほど前になる。

阿部先生の研究スタイルは、先行研究の網羅的な読み方、資料の徹底的な読み込みである。学術書の註にあげられた文献はすべてチェックするだけで満足せずに、すべて読まないと納まらないのである。一点一点眼光鋭く批判の目を向けながら読み進めていく。理論を振り回す研究者には批判的で、一刀両断で切られていく。外国の研究者の物真似や流行する学説に飛び乗った迎合者にも情け容赦ない評価が下る。

一齣をご披露しよう。産業集積に関する研究では、自分で積み上げた研究を土台にして、思索に基づき、膨大な文献と資料の読み込みに裏打ちされた、日英の産業集積の比較が行われる（本書では直接触れられていないが、読者は阿部先生の綿密な研究を手にとられた）。小生の父親は、伊藤忠と丸紅という商社の底層のもと、繊維物業でそれなりに成功したが、小生は父の家業を継がなかった。繊維物業だけは研究するのだけは「やめよう」と誓ったのだが、小学校2年生から重たいものを持ち運びしたので、体に染み付いたものがあるのだろう。阿部先生の商社の役割に関する指摘は、父をみているだけにその通りだと思った。

阿部武司先生は研究だけでなく、一つの考えに囚われることなく、様々な見方や意見を汲み上げ咀嚼するというスタイルで、大学行政にも邁進した。常にプラス思考である。阪大の近代経済学の大家とは異なるスタンスで、広く意見を聞き、思慮し、進むべき方向を模索していく。一旦決めたら粘り強く説得する。「大阪大学アーカイブズの創立」に関する記述を讀まれたい。

アーカイブズや記録管理の学問分野の中で、阿部武司先生の本書の果たす役割は大きなものがあるだろう。若手研究者の必読の文献である。



出版社：クロスカルチャー出版  
発行日：2020年2月29日  
定価：2,000円＋税  
ISBN：978-4-908823-67-1

「アーカイブズと私—大阪大学での経験—」要約

アーカイブズが多様な情報源として研究者にとってはもちろんのこと、内外の行政に携わる人々、さらには一般の人々にも欠かせない機関であることは国際的常識となっている。ところが最近の日本では、政府が都合の悪い文書を隠蔽・廃棄・改竄するといった嘆かわしい事態がまかり通っている。日本人は、記録をきちんと残すアーカイブズの重要性を今こそきちんと認識しなければならぬ。著者は、一九八八（昭和六三）年以降二六三三（平成二六）年まで、大阪大学内にアーカイブズを設置するという任務を負うことになり、一〇年がかりでそれを実現した。本書は、手探りで進めていったその過程を当時発表されたエッセイを通じて明らかにし、近年日本の大学で関心を集めているアーカイブズの設立の一例を示すものである。著者は、同じく変革の過程にあつた大阪大学で、図書館や博物館の運営にも携わり、また学外で企業アーキビストの団体と関わった。本書は、それらの経験にも言及するとともに、深い思考の基礎としての読書の重要性を語り、さらに、日本では理科系学問を偏重する政府の意向により存続すら危惧されている文科系学問が人類の発展に不可欠であること、しかし、日本語の壁に守られたその閉鎖性には確かに問題があり、その克服策として翻訳の奨励を含む、国際化への対応が重要であることを訴える。